同窓生が語る宮澤賢治

小野寺伊勢之助教授と宮澤賢治（6）

若尾紀夫（C昭39・院41）

盛岡高等農林学校５回生で宮澤賢治の先輩であった小野寺伊勢之助は、大正14年に母校に赴任し昭和20年に退職するまで肥料学教室教授として教鞭をとっていた。盛岡における両人の交誼は僅か８年間であったが、その間の出来事については不明なことが多い。前回は小野寺伊勢之助教授の略歴や研究業績、特に賢治との接点と考えられる紫雲英の研究、光原社などについて述べたが、本稿では、新たに分かった小野寺伊勢之助の履歴について追記したい。

小野寺伊勢之助の履歴・追記（1）

追記の背景

小野寺伊勢之は明治43（1910）年３月に盛岡高農農学科を卒業、同年５月に本科研究生（農芸化学専攻）となり、大正２（1913）年３月に同研究科を修了した。その後、欧州に留学したが僅か10ヶ月で帰国（大正４年２月）、大正４年３月に岡山倉敷の大原奨農会農業研究所（後の岡山大学農業生物研究所、現岡山大学資源植物科学研究所）に勤務することになる。これが盛岡高農卒業から岡山に赴任するまでの小野寺伊勢之助の略歴であるが、本人が残した正確な履歴書がないので不明なことが多い。この間の小野寺伊勢之助の足跡について校友会報や同窓会報などで調べたところ、興味あることが分かったので、ここに記録として留めておきたい。

大原孫三郎と盛岡高等農林学校との関係

小野寺伊勢之助の経歴を調べると、大原奨農会農業研究所の創設者である大原孫三郎との関係が極めて重要であることが分かった。そこで最初に大原孫三郎について触れておきたい。

大原孫三郎（明治13年～昭和18年）は、岡山倉敷の大地主で倉敷紡績を経営していた大原家の嗣子で、明治30年に東京専門学校（後の早稲田大学）に入学した。卒業後帰郷、慈善事業家である石井十次を識り社会福祉事業に興味を示すようになり、倉敷紡績工場内の尋常小学校及び倉敷商業補習学校（現倉敷商業高校）の設立、地元子弟のための大原奨学会の開設、孤児院の支援などに奔走し、更に大原社会問題研究所・倉敷労働科学研究所・倉敷中央病院・大原美術館などを創設した。

大原孫三郎は、明治43年２月、大原家奨農会を設立したが、それは自作農育成及び科学的研究と実際的応用による農事の改善を理念とするものであった。大正３年７月２日に約百町歩の土地を寄付し、財団法人大原奨農会農業研究所を設立したが、その主な事業は農業研究所（種芸・園芸・化学・昆虫・病理・事務の６部門）の経営で、下記のような新進の研究員が集められた（「大原孫三郎伝」）。その後、昭和４年３月３日、大原奨農会農業研究所は大原農業研究所に改称された。

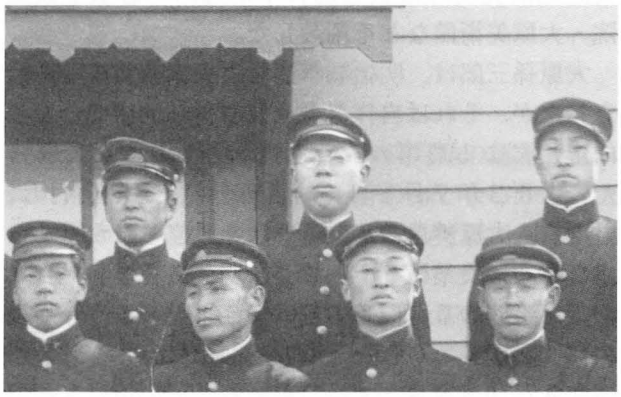
所　長：農　学　士　近藤萬太郎（初代所長）
種芸部：農　学　士　近藤萬太郎
　　農学得業士　三宅　千秋
園芸部：小山　益太　川又綾之助
化学部：農　学　士　大杉　　繁（化学部部長）
　　農学得業士　小野寺伊勢之助（化学部員）
昆虫部：農　学　士　春川　忠吉
病理部：農学得業士　西門　義一（２代所長）

大原孫三郎によって設立された大原奨農会農業研究所と盛岡高等農林学校とが、当初から密接な関係にあったことはあまり知られていない。明治42年、大原孫三郎は、後に初代所長となる近藤萬太郎（明治41年東京農科大学卒業）を採用して大原家奨農会の設立準備に取りかからせ、更に盛岡高農を卒業（明治43年３月28日）した小野寺伊勢之助を採用し、近藤萬太郎とともに東京において農業技術に関する研究に着手させた。

小野寺伊勢之助と大原孫三郎との関係は、この頃から始まると思われるが、これについては改めて述べたい（追記２）。その後、盛岡高農肥料学教室の大杉　繁教授（大正３年10月22日に依願退職）が大

原農業研究所化学部部長として赴任し、大正４年３月には小野寺伊勢之助が化学部員として就任することになる。

病理部（植物病理研究室）の西門義一（本籍：大阪府三島郡清渓村、現在の大阪府茨木市）は、盛岡高農農学科（植物病理学専攻）８回生（大正２年３月22日卒業）で、近藤萬太郎の跡を継いで２代所長となり、後に岡山大学農学部附属大原農業研究所所長（昭和26年）となる。西門義一は、３年の時に特待生・旗手に選ばれ、山田玄太郎教授の指導で植物病理学を専攻した。卒業後は母校に残り化学実験室助手（雇）（大正２年４月）として植物・植物病理実験を担当、その後（大正３年１月）農学科第１部の教師として教鞭をとっていた。



西門義一（後列中央）
（大正２年３月盛岡高農得業写真抜粋）

「大正２年８月盛岡高農の夏休みで、郷里の大阪府茨木の田舎に帰っていた時、突然倉敷から“病理にとる。すぐ来い”との電報が届いたので倉敷に行くと先輩の小野寺伊勢之助博士（注：この時はまだ博士ではない。昭和３年７月、農学博士の学位受領）に迎えられ大原邸に出向き、大原孫三郎から直接に農学校設立の説明を受け、“植物病理部へ来ないか”と勧誘され、即座に受諾した。」といわれる（「研究生活の思い出」）。このように西門義一は、母校の助手時代に大原孫三郎から直接招聘を受け受諾したが、その後も盛岡高農（大正３年６月頃に教師を辞任）や東京西ヶ原農事試験場病理部で研究（植物病原糸状菌の純粋培養）を続け、大正４年夏になり新設の大原農業研究所（植物病理研究室）に赴任して稲いもち病の研究に着手した。同氏は、日本農学賞受賞や日本植物病理学会会長などわが国における植物病理学分野で大きく貢献した。

種芸部の三宅千秋（本籍：岡山県浅口郡連島村、現在の岡山県倉敷市）は、盛岡高農農学科２回生（明治40年４月卒業）で、卒業後、東京農科大学助手となり農業物理や気象学などを研究し、「日本区分農事暦―各地方農家年中行事―：稲垣乙丙・三宅千秋著、博文館、明治42年」を出版した。共著者の稲垣乙丙は、当時は東京農科大学教授であったが、盛岡高農の創立期に農学科教授（物理気象・作物・農具）として在籍していた（明治36年10月30日～明治39年６月25日）。三宅千秋は、明治43年11月８日付で盛岡高農の助教授となり物理・同実験・気象・農具を担当したが、もともと関豊太郎教授の留学（明治43年12月～大正２年５月）に伴い発令されたもので、在職２年半で退職（大正２年４月９日）し、その後は郷里岡山に戻っていた。大正３年春に大原孫三郎に乞われて大原農業研究所研究員に就任することになる。「三宅千秋君　岡山県篤農家大原氏経営の農事試験場に勤務さらるゝ事になりしと云う。」校友会報 第25号（大正３年７月18日発行）

小野寺伊勢之助の履歴・追記（２）

小野寺伊勢之助が盛岡高農を卒業してから大原奨農会農業研究所に就職するまでの経歴について、校友会報・同窓会報・盛岡高等農林学校一覧などの資料を調べたところ、同窓生便り・名簿・住所移動記録などのなかに多くの情報が残されていることが分かった。

盛岡高農を卒業した小野寺伊勢之助は、そのまま研究生（明治43年５月２日）として残り、３年間在籍し大正２年３月27日に修了したが、学則第36条では「研究生の在学期は２個年」とあるので、実際には１年余分となる。校友会報 第20号（大正２年６月15日発行）・盛岡高農一覧（大正４年１月25日発行）研究生時代を中心に小野寺伊勢之助がどのような経歴を歩んだのか明らかになってきた。

・小野寺伊勢之助君は本年度卒業後直ちに上京農科大学化学教室にて勉強の上岡山県とかに赴任する筈なりといふ。校友会報 第８号（明治43年５月28日発行）
・小野寺伊勢之助君は卒業後徴兵検査を受けて甲種に合格したる由なるが今は大学に通学して化学書を繙いたり分析をしたり致し居る由まだよく馴れざるを以て種々勝手が分からぬ由書信の一節に見ゆ。校友会報 第９号（明治43年７月20日発行）

盛岡高農卒業（明治43年３月28日）直後に上京、東京農科大学化学教室で勉強していたが、その後、岡山倉敷の大原家奨農会（明治43年２月設立）に赴任する予定であるという。「明治43年大原家奨農会を立ち上げ、盛岡高農を卒業した小野寺伊勢之助を

採用して近藤萬太郎とともに東京において農業技術に関する研究に着手させた。(大原孫三郎伝)」という文章と一致する。ここで「小野寺伊勢之助はいつどのようにして大原孫三郎と知り合ったのか」という疑問が残る。これに関しては資料がないので不明であるが、大原孫三郎は何らかの機縁で卒業前の小野寺伊勢之助に接触し、その才能を認め勧誘したのではないかと推測される。但し、岡山に何時行く予定であったのか実際に行ったのかは不明である。

盛岡高農卒業後に徴兵検査で甲種に合格したが、その年はそのまま東京農科大学化学教室に通い化学や分析の勉強していたという。

・「中野電信大隊第一中隊一年志願兵　小野寺伊勢之助」校友会報 第11号（明治44年３月８日発行）
・東京府中野通信隊第一中隊に勤務中なる同君は、現字通信及び軍用建築に従事し無線電信なども練習するなど学校にある如き有様にて校友会報は慰籍となる由通信ありたり。校友会報 第12号（明治44年６月10日発行）

会員住所移動欄の記載によると、明治44年２月頃には東京中野電信大隊の一年志願兵として入隊し、現字通信や軍用建築、無線電信の練習など学校で勉強しているような感じであるという。

・東京府下中野電信隊に入営中なりし同君は昨年冬除隊となり今は本校化学実験室にありて酸性土壌などの実験中なり。校友会報 第15号（明治45年３月14日発行）
・ドイツ語論文の紹介「葉緑素存在せざるもCO_2、KOH、Hに依る炭水化物の光化学的合成（Die Ernag. der Pfz. 1911, No.7. S.65-67)」校友会報 第15号（明治45年３月14日発行）
・除隊後本校化学実験室にありて実験中なる同君は今度高橋君の後を襲ふて農学校教師を嘱託せらる。校友会報 第16号（明治45年６月30日発行）

卒業した翌年の冬（明治44年末）に電信隊を除隊して、盛岡に戻り母校の化学実験室（第２教舎化学実験室）で酸性土壌などの実験に取り組んでいた。この実験は、本科研究生の研究に相当し、当時酸性土壌の研究をしていた大杉教授が指導したものである。これが報文「酸性土壌に関する研究」（校友会報 第27号・大正４年５月27日発行）として発表された。

研究生の身分であったが、農学科６回生で当時動物学教室の助手をしていた高橋九兵衛の後任として岩手県立農学校教師嘱託として働いていた。今でいうアルバイトである。

・論文「アミノ酸定量法としての亜硝酸法及醤油中のアミノ酸に就て：農学得業士　小野寺伊勢之助　論文投稿日付明治45年５月10日」校友会報 第16号（明治45年６月30日発行）

この論文は、テーマや序文の内容、謝辞、投稿時期などから、小野寺伊勢之助の得業論文（明治43年３月）であろう。論文の序に、「余は一昨年（注：明治43年）鈴木梅太郎教授の指導により其最も簡便にして確実なる亜硝酸法によりて諸種のアミノ酸化合物に就き比較を試みたり。」とあり、また最後には「鈴木梅太郎教授と大杉　繁教授の指導への謝辞」がある。オリザニン（ビタミンB1）の発見で有名な鈴木教授（明治39年５月３日・盛岡高農教授赴任）は、化学・植物栄養・蛋白質化学などを専門とし「盛岡農芸会報 第２号」（明治42年４月発行）に「米の蛋白質の成分：白米蛋白質の塩素分解によるアミノ酸の分離」を発表している。従って、小野寺伊勢之助が鈴木教授の直接指導を受けて蛋白質やアミノ酸の研究をしたものと思われる。

・小野寺伊勢之助の入営　本校化学実験室に助手たりし同君は過般招集せられて中野通信隊に入営せられし由。校友会報 第17号（明治45年・大正元年11月４日発行）

小野寺伊勢之助は一時期（期間は不明）、化学実験室の助手をしていたが、大正元年の秋頃に再度中野通信隊に招集され上京した。

・ドイツ語翻訳論文「刺戟性肥料に関する実験的研究」校友会報 第19号（大正２年３月28日発行）

この論文は原著論文ではなく、小野寺伊勢之助がドイツ語の論文「Die Ernahrung der Pflanze (1912), Uebersetzung einer Arbeit Von E. Bobllanger」を翻訳紹介したものである。

・名簿「本科研究生　小野寺伊勢之助」盛岡高農一覧（大正２年１月28日発行）
・本校研究生小野寺伊勢之助氏は学則第38条により大正２年３月27日研究證書を授与せられたり。校友会報 第20号（大正２年６月15日発行）
・名簿「在独逸国　小野寺伊勢之助」盛岡高農一覧（大正３年２月15日発行）

名簿に「独逸国に在住」とあるので、小野寺伊勢之助は名簿が発行された時点（大正３年２月以前）にドイツに留学していたことになるが、下記の時期（大正３年４月24日）と矛盾する。西門義一（「研究生活の思い出」）によると「大正３年１月ドイツ留学から帰朝した近藤博士、小野寺博士、春川博士（当時はみな博士ではなかった）と共に、倉敷で今後の計画について色々相談した。近藤博士が農学校よりも農業研究所を作るべきだと主張し、それを大原氏に進言し容れられた。」とある。従って、名簿「在独逸国　小野寺伊勢之助」は間違いか、すでにドイツ留学が決まっていたので事前掲載かもしれない。

・君は岡山県の豪農小原（注：大原の間違い）氏の経営にかゝる農事試験所に勤務中なりしが今度留学を命ぜられ過般出発西比利亜経由にて独逸到着同地の大学にて勉学中之由同君の造詣は期して待つべし。校友会報 第24号（大正３年５月28日発行）

小野寺伊勢之助は、研究生時代（明治43年５月２日～大正２年３月27日）には、大原家奨農会を設立した大原孫三郎から個人的援助を受けていたものと思われる。「大原農業研究所史」によると小野寺伊勢之助の農芸化学部の研究員としての在籍期間は大正３年～大正９年と記されている。また後に触れるが、小野寺伊勢之助が大原奨農会農業研究所に正式に就任したのは、大正４年３月（「大原奨農会退職者関係書類録」）となっている。この記録が正しいとすると、研究生修了後、遅くとも大正３年からは岡山倉敷に赴任して農業研究所に勤務しており、大正３年４月24日に農芸化学（肥料学）研究のためシベリア経由で独逸国東プロシアのケーニヒスベルク大学に留学することになる。

大原孫三郎は「近藤萬太郎や小野寺伊勢之助のような有為な人材に対しては海外に留学させ、進んで新知識を取り入れ事業に役立たせた。直接事業に関係がなくても、彼がこれはと見込んだ人物に対しては海外留学の援助を惜しまなかった。（「大原孫三郎伝」）」といわれる。従って、ドイツ留学は、盛岡高農の出張命令（出発・帰国などの記録）がないことから官費によるものではなく、大原孫三郎（大原家奨農会）の援助によるものであろう。

・寄稿「乱渦を避けて：在英農学得業士　小野寺伊勢之助」校友会報 第26号（大正３年12月16日発行）

ところが不運なことに、第一次世界大戦の勃発（大正３年７月）のため急きょ英国に避難してケンブリッジ農科大学で研究を継続することになったが、それも短期間で切り上げ帰国することになる（大正４年２月11日）。寄稿「乱渦を避けて」は在英中の小野寺伊勢之助がそれまでの経過をまとめたもので、詳細は前号で述べた。

・名簿「岡山県倉敷郡大原農業研究所　小野寺伊勢之助」盛岡高農一覧（大正４年１月25日発行）

留学から帰国する直前の名簿では、所属は大正３年７月に設立された「岡山県倉敷郡（大原奨農会）農業研究所」となっている。大正４年２月11日に帰国、同年３月に大原奨農会農業研究所化学部員として正式に就任することになる。恩師の大杉　繁教授は、近藤萬太郎所長の勧めで大原農業研究所化学部部長として赴任（大正３年11月）し、大杉教授の勧誘で小野寺伊勢之助が同研究所に就職したのではないとか思われていた。しかし小野寺伊勢之助は盛岡高農時代から大原孫三郎の知遇を得ていたので、大杉教授の勧誘ということはあり得ない。

・論文「酸性土壌に関する研究：農学得業士　小野寺伊勢之助」校友会報 第27号（大正４年５月27日発行）

先に述べたが小野寺伊勢之助は、研究生時代には大杉教授の指導で酸性土壌の実験を続け、その研究成果をまとめたものが上記論文で恩師大杉教授への謝辞がみられる。

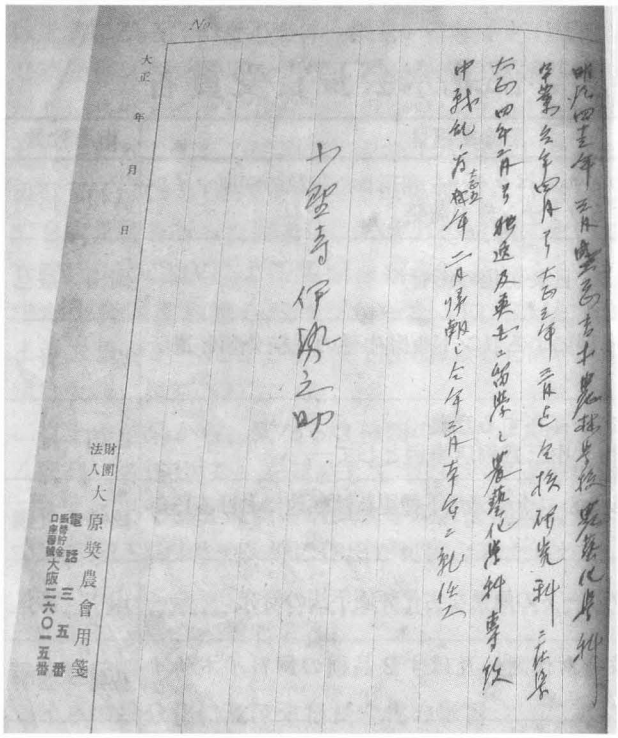
・小野寺伊勢之助（明治43卒業）：朝鮮慶尚北道なるミツワ浦項農場にて勤務中の君は都合により辞任せられ目下母校化学実験室に於て研究せられつつあり。盛岡高農同窓会報 第９号（大正13年８月10日発行）

大原農業研究所退職（大正９年４月19日）後、丸見屋商店に勤務したが、その間の詳細は不明である。丸見屋商店退職（大正13年１月15日）後、盛岡高農の講師嘱託として就任（大正14年６月23日）するまでの１年５ヶ月間は空白であったが、その期間は母校に戻り化学実験室において研究生活を送っていた。

小野寺伊勢之助自筆の経歴

「明治四十三年三月盛岡高等農林学校農芸化学科卒業同年四月ヨリ大正三年三月迄同校研究科ニ在学

大正四年二月ヨリ独逸及英国ニ留学シ農芸化学科専攻中戦乱ノ為大正五年二月帰朝シ同年三月本会ニ就任ス　小野寺伊勢之助」



小野寺伊勢之助自筆の経歴
（岡山大学資源植物科学研究所分館所蔵）

「大正・年・月・日　財団法人大原奬農会用箋」を用いた本人自筆のメモ書と思われる略歴が岡山大学附属図書館・資源植物科学研究所分館所蔵の「大原奬農会退職者関係書類録」に残されている。いつ書いたのか日付は特定できないが、就任時に大原奬農会農業研究所に提出したものであろう。年については実際の履歴と異なるところがあるが、本人の記憶違いではないかと思われる。

小野寺伊勢之助は明治43年３月に盛岡高農農学科を卒業、本科研究生、欧州留学を経て大正４年３月に大原奬農会農業研究所に就職した。このように書くとその足跡は比較的平坦なようにみえるが、実際は屈曲したものであった。例えば研究生でありながら、大原孫三郎の知遇（スポンサー）を得て継続的な援助を受けていたこと、大原家奬農会設立のため東京で化学や農業技術の研究を続けたこと、岡山倉敷にしばしば往来したであろうこと、徴兵検査で甲種合格し志願兵として電信隊に入隊・除隊を繰り返したこと、短期間であっても盛岡に戻り研究を継続したことなどである。

小野寺伊勢之助は成績優秀な学生で２年・３年の時には特待生に選ばれ、また根っからの研究者であった。少しの暇をみつけては化学実験室にこもり実験を行い論文を取りまとめた。得業論文、研究生論文、ドイツ語翻訳論文と論文紹介が校友会報に掲載されているが、当時にあっては、このようなことは他に類をみない。数多くの専門書を著し優れた研究業績を挙げ、更に子弟の教育にも力を入れて大きな業績を残した。在職中に失明しながらも教壇に立ち、講義の際には黒板に向かい手でその広さを確認して文字を書いたとも伝えられる。また自分の著書を学生に朗読させ、小さな誤りも聞き逃すことはなかったといわれる。（「小野寺伊勢之助博士の肥料学研究と周辺の人々」）小野寺伊勢之助は、研究者として教育者として生涯真摯に生きたが、その起点は少なくとも盛岡高農時代にあったと思われる。

次回は紫雲英と賢治、小野寺伊勢之助の著書「肥料学教科書」、賢治が小野寺伊勢之助に依頼した「得業研究」などについて述べたい。

本稿をまとめるに当たり千葉　明氏（元岩手県立農業試験場長）の資料を参考にさせて頂いた。また遠矢厚志氏（岡山大学附属図書館・資源植物科学研究所分館）からは貴重な資料・情報を送って頂いた。ここに改めて謝意を表します。

参考資料

・財団法人大原農業研究所史：西門義一編、大原奬農会（昭和36年）
・西門義一　研究生活の思い出：西門義一著、山陽印刷（昭和48年）
・大原孫三郎伝：大原孫三郎伝刊行会、中央公論（昭和58年）
・盛岡高等農林学校と鈴木梅太郎・宮沢賢治：岩手大学農学部農芸化学科内記念碑を建てる会、杜陵印刷（昭和59年）
・わしの眼は十年先が見える－大原孫三郎の生涯－：城山三郎著、新潮社（平成９年）
・小野寺伊勢之助博士の肥料学研究と周辺の人々：千葉　明著、肥料科学29号（平成19年）